



〈堤川以東の奥州街道〉

茶屋町地蔵 1



堤川開削工事の犠牲者を生かすために、文禄4年(1595)に建立されたといわれています。堤川の開削は、永禄から天正にかけてのころ(1558~92)、横内城主が安瀾に注いでいた荒川を、合子沢(ごうしざわ)川・横内川・駒込川と合流させたという伝説です。

地蔵があったのは初めはもっと上流でしたが、洪水で流されたものを茶屋町の人びとが拾って祀ったといわれています。天保の末ころ(1844年)地蔵堂を建てたが、昭和20年(1945)7月28日の青森大空襲で焼きました。もともとの地蔵堂の場所は、現在よりも川岸です。地蔵だけが焼け残って、今の場所に御堂を建て直しました。江戸時代には、この茶屋町地蔵の辺りと対岸の米町通りの間に渡しがありました。これが奥州街道です。

諏訪神社 2



青森開港にあたって、それまで造道(つくりみち)字浪打の諏訪林から堤川の中流に遷宮したと伝えられています。明治5年(1872)の博労町の火災で類焼し、社殿などが焼失しました。その後、現在地に移り、明治6年に村社となりました。藩政時代は青森五社のひとつに数えられました。神主が幣を振り、獅子が舞い、笛や太鼓を打ち鳴らす神輿行列の絵が遺っています。

松尾神社 3

菅江真澄は寛政8年(1796)に、この社を訪れ、義経の伝説を聞いています。「八月朔日のあした 藪公鳥さかばやと塘川を橋より渡りて、茶屋町をめてに松森のやかたにいと近う、皂狹子(サイカシ)のとしふる大木の、ふせるがごとき社のうちに祠あり。むかし源九郎義経のはぎまきをかけて、神とは齋ひ奉れりといふ。こは松前の西なる磯辺に小山権現とて、小山判官のかたはゞきを、かく、神といはひまつるのたくひにひとし。この松社のほとりなるみやとごころに、今は松尾の神をうつし奉れど、なべて鹿脛藤明神と申といふ。あらはゞきの神は血鹿の浦の



神籬の撰社、あるは、吾ふる郷の刀鹿の峰大汝の命の神社の側にも、あらはゞきの神の祠あり、おなじ神にや」(『すみかの山』)

合浦(がっぽ)公園 4



旧奥州街道の松

合浦公園の中央を東西に横切っている遊歩道が、かつての奥州街道です。公園内の街道には、往時を偲ばせる松並木が残っています。わけても、公園中央の「三誉(みや)の松」は樹齢が470年を超える老松で、歴代の弘前藩主がここで野宴を開いたといわれています。公園は、水原衛作と柿崎巳十郎の兄弟が明治15~27年(1882~94)にかけて築き、青森町に寄附したものです。

造道の松並木 5

造道の旧国道に松の並木が残っています。奥州街道は、合浦公園から旧国道の浜手側を、この松並木に合流しています。



露草遺跡・沢田遺跡 6 7

両遺跡ともに海岸部に位置する奈良時代の遺跡です。市内では類例の少ない8世紀代の土師器が出土しています。また、沢田遺跡では10世紀代の遺物も出土していることから、平安時代にも集落が続いていたことがうかがわれます。

野内枡方跡の松並木 8

右手の野内小学校の辺りに、松並木が残っています。ここに、野内の枡方がありました。野内の湊は、江戸時代、今より遙かに賑わっていました。大坂の商人金屋金四郎が、この辺りの木材を伐り出して船積みし、大坂で商っていたという記録があります。北前船で瀬戸内の塩が運ばれて来るまでは、大浦海岸の塩作りも盛んでした。田畑の肥料に使う干糞(ほしか)も荷積みされていました。蝦夷地の漁場への出稼ぎも江戸時代から多く、津軽海峡を船が行き来していました。



野内番所跡 9

野内の枡方跡からさらに東へ進めば、貴船の社の手前で右側に松の木が見えます。野内の御番所です。碇ケ関・大間

越と並ぶ弘前藩の三関のひとつでした。元和年間(1615~24)に出来た関所で、弘前藩と黒石藩が警護していました。貴船川も、かつては五十石船が出入りしていました。明治になってからも、練場へ人と米・味噌・酒が渡っていました。



龍の口 10

貴船神社のある鷲尾山の頂には、義経の妻・浄瑠璃姫が眠っているという伝説があります。その真下の崖は、八洞の竜が口を突き出しているように見えることから、「龍の口」と呼ばれています。龍の口の麓の集落は、地元では「鷲尾」と呼ばれています。野内はアイヌ語で「鷲の尾」という意味だということを、菅江真澄も貴船の宮司から聞いています。



貴船神社 11



貴船宮別当は代々修験で、浦町組・横内組(寛政以後は油川組・後湯組まで)の農家に御借り物料が課せられていました。貞享3年(1686)、別当花言坊が五穀成就の神事を代官へ願ひ出た文書に「源義経公が松前に渡海の節、心に願うことあって御建立なされた宮」だと書かれています。義経の妻・浄瑠璃姫または朝日御前がここで亡くなったという伝説もあり、不思議なことに雨の前になると境内にある猿田彦の石が濡れてくると言い伝えられています。

天明8年(1788)、菅江真澄は貴船神社の宮司から義経の伝説を聞いています。「弁財天と祝ひ祀る末社あり、これなん鬼が安十郎姫の御霊なりとも、又義経のをんまめにてやあらん旭の前と言へるが、此君をしたふの心せちに、寄りたる船の中に重き病をして身まかり給ひしを、ここに煙となし、しらほねは山奥の玉清水といふ村に埋み、塚してしるをたて、その寺を朝日山安養寺常福院といふ」。ここに義経の伝説があるのかもしれないが、義経ではなく鬼の話かもしれないといったほどに、曖昧なものでした。そこで、真澄は問います。「その鬼が娘とはいづこの鬼にてか」。神主の答えは、さらに曖昧なものでした。「云、蝦夷などのたけきをいひしにや。朝日の前も、いづらの人ももさらにつたへもさふらはず。こなたへとて徑にさしいざなへるに、あやしうさし出たる岩どものあり、名を竜(たつ)の口といふ」。